

中世アリストテレス主義における二種類の「神的摂理」

高橋厚(白百合女子大学)

西欧の哲学・神学的伝統において、大きく分けて二つの「神」概念が存在してきた。その一つは、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教によって信仰の対象である「アブラハムの神」、すなわち大文字の「唯一神」であり、もう一つはギリシア以来の哲学の「神論」において問われる「哲学者の神」である。その二つの「神」概念に齟齬があること、またその齟齬が神学・哲学双方の歴史において様々な論争を生んできたことは、(未だ多くの問題が論究される余地があるとはいえ) 広く認識されてきたように思われる。だが、この「神」概念と密接に関連する「神的摂理」の問題、すなわち我々が住む世界への「神」の介入の問題について、どのような理論的な緊張関係あるいは齟齬が存在していたのかについては、これまで十分な理解がなされてきたとは言えない。

本発表では、十三世紀のスコラ学者たち、中でもトマス・アクィナスによって確立された「神的摂理」の理解、すなわち我々が住む世界に介入する「神」を大文字の「唯一神」とあるとする考え方とは根本的に異なる「神的摂理」の考え方がアリストテレス主義の中に存在していたこと、そしてそのような考え方が、キリスト教的世界観と相容れないために、中世から初期近代におけるアリストテレス哲学の受容の局面で繰り返し論争を生んできたことを検証する。

以下では、発表の概要をより具体的に説明することにする。西欧の中世以後の哲学的・神学的伝統における「神的摂理」の理解の大枠は、十三世紀におけるスコラ学、なかでもトマス・アクィナスによって確立された。それによると、この世界の始原と目的として大文字の「神」が措定され、我々が住む世界の事象は「神」の「意志」によって規定された秩序の中で生起するとされる。確かに、この「神」が、現行のものとは異なる理性的な秩序を自由意志によって創造することが可能なかどうか、また「神」の意志的な介入は恒常的なものなのかどうか、等の諸論点に関しては見解の相違があった。しかし、見解の相違があるとしても、我々が住む世界の秩序の原因を大文字の「神」に求める考え方自体は、スコラ学以後の議論において、(たとえスコラ学的思考が批判された後になっても) 大きな前提として踏襲されてきた。

だが、このようなスコラ学以後の考え方とは異なる「神的摂理」の理解が、古代のアリストテレス主義の伝統には存在していたのである。しかも、その存在はこれまでの哲学史研究において、不当に看過されてきたように思われる。それは、この世界に介入する「神」あるいは「神的なもの」とは、(大文字の「唯一神」ではなく)「神的な物体」である「天体」とあるという考えだ。このような「神的摂理」の考えを打ち出したのは、古代における最も重要なアリストテレス註解者であったアレクサンドロスのアフロディシアスである。アレクサンドロスは、この見解をアリストテレスの議論から導き出される理論として確立した。大きな前提として、古代において、アリストテレス自身には「制限された神的摂理」の考えしか存在しない、言い換えれば、我々が住む世界に対する「神」の介入についての理論が存在しないと考えられていたのである。というのも、アリストテレスの「神論」とも称される『形

而上学』Λ巻で論じられる「不動の動者」が「神」であるとする、その動者は文字通り「不動」、すなわち自己以外への思慮を一切行うことがない存在者であり、結果的にこの自然世界にはいかなる配慮も行っていないことになるからだ。このような前提の上で、アレクサンドロスは「不動の動者」ではなく、その「動者」によって動かされる場所の「天体」こそが、靈魂を備えた神的な存在者として、この自然世界に介入を行うという考えをアリストテレス的な理論として提起したのである。

このようなアレクサンドロスによって示されたアリストテレス的な「神的摂理」の理解では、この世界の事象の秩序の原因として考えられるのは、(大文字の「神」ではなく)あくまで「天体」なのである。このような考え方では、この自然世界の事物の運動をたどっていくと、その始原に大文字の「神」が存在するといった世界観は取られないことになる。つまり、アレクサンドロ的に理解されたアリストテレス哲学の世界では、この世界の事物の運動の始原を辿ったとしても、そこには(トマス・アクィナスが「神の存在証明」で論じたような)「唯一神」が現れるのではなく、あくまで「神的な物体」としての「天体」に行き着くだけなのだ。

このような「天体」を中心としたアレクサンドロスの「神的摂理」の理論は、中世から初期近代までアリストテレスの著作の「註解者」として特権的な位置を占めていたアヴェロエス(イブン・ルシュド)によってアリストテレス哲学の核心部に組み込まれることになった。その結果、アリストテレスの著作を読む者たちは、アヴェロエスの註解書も同時に読んでいたので、アレクサンドロ的な理論をアリストテレス哲学の正統な解釈として見出すことになったのである。この点で、「キリスト教哲学」における「唯一神」を第一原因とした「神的摂理」の理解と、アレクサンドロス=アヴェロエス的なアリストテレス哲学における理解との根本的相違が問題として繰り返し浮上することになったのだ。

本発表では、上で簡単に述べたようなアレクサンドロスとアヴェロエスにおけるアリストテレス主義の「神的摂理」の議論自体を整理した後に、その「神的摂理」の考えへの批判(あるいは抑圧)という観点から、ピエール・デュエムが論じて以来、西欧の学知全般における大きな転換点と目されてきた1277年のアリストテレス哲学に対する禁令の内容を具体的に再検討する。それにより、その禁令の中に宇宙論的な項目が並ぶ背景として、アレクサンドロ的に理解されたアリストテレス哲学があったことが、これまでの研究よりも、より適切に理解されるはずである。